

遙かなる「日本三古碑」を巡る旅

藤 由 美

おとし1993年の初夏、私達の会は宮城県の仙台と多賀城へ旅行した。そのとき歩いた多賀城址の遺構も素晴らしかったが、私達にとって大きな収穫であったのは、城の南門跡の傍らに立つ「多賀城碑」の歴史的な価値を改めて知り得たことであった。

そして、東国には、この古碑のほかに「多胡碑」「那須国造碑」が「日本三古碑」といわれて大切にされてきたことを知り、会としてその三古碑を見てみたいと、3年がかりの計画がスタートした。



多賀城碑の覆堂

この三古碑を巡る旅は、私達を二つの時代にタイムトリップさせた。一つは、三古碑の建て

られた8世紀の東国フロンティアの「国」の有様であり、もう一つは、草叢から掘りだして苔を落とし、碑の歴史的価値を考証して顕彰と保存に努力した江戸時代の人々の姿であった。今ここに、3年間の会の県外巡見の主要テーマとなった「日本三古碑を巡る旅」のアウトラインを紹介したい。

1 「壺の碑・多賀城碑」を訪ねて

多賀城址の見学を目的に宮城に旅したのは1993年6月のことであり、会としては初めての県外一泊旅行であった。（「史談八千代」第18号に報告してある。）

762年の多賀城碑の建立の背景となる世界は、時の権力者藤原仲麿の四男朝鸕が、東北の行政・軍事上の全権を委ねられて蝦夷と正面から対決し、後の三十年戦争の発端を作った時期であった。

多賀城の大修理を記念して建てられたこの碑は、仲麿父子の唐風好みと律令国家の華夷思想を表しているといわれている。生真面目な書風、雄大なこの碑の拓本を眺めていると、「京」「^{まつかこく}蝦夷国」「^{まつかこく}靺鞨国」への里程に朝鸕の広大な気概と同時に、むしろ彼の悲壮なほどの戦意と孤独感が感じられてくるのである。

多賀城碑は、三古碑の中でも昔から話題が多く、土中から発見された江戸時代の初め

から、仙台藩から歌枕の「壺の碑」の名で国内のみならず、中国、朝鮮まで喧伝され、覆堂が作られるなど、保護策が講じられた。同時に、学者、文人の間に一大ブームを呼び、また、南部藩の坪村の碑との間に「壺の碑」本家論争を起こしたりした。明治以降には、多くの著名な学者から様々な疑問が出され、偽作説が主流となった。しかし、昭和30年以降の城址発掘により、文献にない碑文の「天平宝字6年の修造」の事実が証明され、偽作説が覆されつつあるという。



多賀城碑

各国界への里程についても、諸説がある。古田武彦氏が『真実の東北王朝』にユニークな仮説を展開しているが、アマチュアの歴史好きに邪馬台国論争のような謎ときを今なお提供してくれる興味深い古碑である。

私達が多賀城を訪れたときは、ちょうどNHKの大河ドラマのテーマになっていて、古代東北史の中の多賀城と平泉が脚光を浴びた年であった。

いずれにしても、律令政府の東北経営の最前線に立つこの碑は、考古学の成果と、対する「蝦夷」の視点から時代把握がなされることにより、その意義が今後更に深められていくと思う。

2 酷暑の中の群馬県博「三古碑展」詣で

例年になく猛暑となった1994年の夏、高崎の群馬県立歴史博物館で「日本三古碑は語る」という企画展と4回の講演会が催された。秋に那須国造碑巡見の計画もあり、会員の有志で高崎に通うこととなった。この文字どおり「収穫の多い高崎詣で」の次第は、最も熱心に通われた平野氏が本会の「郷土史研通信第7号」に報告されているとおりである。

特に、斎藤忠氏の「金石文へのいざない」という講演は、古代中国文字文明の歴史的な深さとその影響の広域性を示しつつ、その中に「日本三古碑」の位置付けを明らかにされ、心打つものがあった。

また、300点以上の展示品も貴重なもので、その中に江戸時代の三古碑の拓本用の模刻。すなわち、拓本を量産するため本物の拓本をもとに模刻した石板や版木が数多く展示されていた。そして、この使い込んだ模刻に、古碑の拓本を求める人の多さと、当時の庶

民の文化の深さを思い知らされた感がした。

博物館のある「群馬の森」の近くに「観音山古墳」がある。講演の帰りに、日が傾いてもまだ熱気が残る暑さの中、この古墳に立ち寄ってみた。この地に君臨し、藤の木古墳に劣らない数多くの副葬品と共に眠ったこの大前方後円墳の主は、名をとどめることはなかった。碑文に永遠の名を刻んだ三古碑の時代は、豪華で大型の古墳が終えんし、律令と仏教がそれに変わるところに当たっている。時代が速やかに流れいくこのころ、また人の価値観も大きく変わり行くことを感じた。

3 那須国造碑を訪ねて

「那須国造碑」とその周辺の史跡見学は、1994年9月、貸切りバスでの日帰り旅行となった。雨中であったが、バスの効率性をいかして大雄寺、黒羽城、雲巖寺などを巡った後、湯津上の笠石神社で国造碑を拝観した。碑は、保存のため水戸光圈により建立された堂内に御神体として奉られていたが、拝観料を納めて宮司さんに開けていただき、間近で見ることができた。

この碑は、那須直^{あたしいで}韋提の墓碑で、堂の基壇がその墓所らしいが、その近くには光圈が墓所と推測して、丁寧に発掘した5～7世紀の古墳群が、また、やや離れた小川町には那須郡衙跡が見つかっている。私達は、それらの発掘の成果を展示した資料館などを見学し、河川とそれに沿って広がる段丘のしっとりと美しい風景に古代那須郡の姿を思いつつ下野の国を後にした。

なお、この旅行記は「郷土史研通信第7号」に、また、この碑については平野氏の論考が本誌に掲載されているので、参考にしていきたい。

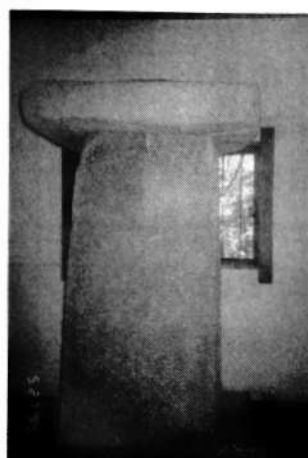
4 多胡碑を含む上野三碑を訪ねて

私が古代史に興味を持ったのは、20年ほど前に金達寿氏が『日本の中の朝鮮文化』の本を出され、東アジアの中に日本の古代史を考えていこうと呼びかけられたのがきっかけであった。それまでに戦前の皇国史観は否定されたとはいえ、「帰化人」という言葉が示すように、「大和民族」中心の建国史観の残っていた古代史の世界に新しい視点での問題を提起したことは、新鮮であった。そして、この提起は、独自の文化を持つ南島や北日本、山間や海辺などの民衆の多角的な視点から、日本列島の歴史を構成しようとする最近の歴史研究につながっているように思える。

金達寿氏が『日本の中の朝鮮文化』第1巻で、とりあげた史跡の一つに群馬県吉井町

の「多胡碑」がある。「多胡碑」は、尾崎喜左雄博士の読み方によれば、「上野国片岡郡、緑野郡、甘楽郡を并せて……羊に給いて多胡郡と成す。和銅4年」と刻まれた建郡碑で、この旧多胡郡は、新羅人入植の地であるという。韓（から）に通じる「甘楽」の響き、そして、「^{からしな}辛科神社」、その社宝「懸仏」は秦氏の一流惟宗氏の奉じたものであるという。機織りも盛んで「^{おりも}織裳郷」も多胡郡に属する。

また、旧多胡郡には、「多胡碑」のほかに、「金井沢碑」と完全な石碑として日本最古の「山ノ上碑」が現存し、「上野三碑」と称され、7～8世紀初めの郷里制や仏教の広まりを今に伝えている。



多胡碑

今年は、本会の旅行先を「上野三碑」を中心に巡見することに決めて、バスで群馬県南西部を回ることとし、5月の初夏の日差しの中、山名八幡宮から続く丘の上の「山ノ上碑」、沢沿いの道からやや登った所の「金井沢碑」、吉井町の集落の中の「多胡碑」を見学した。

三碑とも立派な覆堂に納められてガラス越しの見学であったが、「山ノ上碑」と「金井沢碑」のまろやかな形と質感、「多胡碑」の素朴でありながら六朝風書体の格調高さを感じることができた。

特に、「多胡碑」は、笠石をいただいた方柱で、「那須国造碑」とよく似ており、共に朝鮮半島との共通性が強いとのことであり、唐風の「多賀城碑」とは違った親しみやすさを感じる碑であった。そしてまた、「多胡碑」のある風景は、鐺川に沿って広がる河岸段丘と隣接する古墳群など、「那須国造碑」のある湯津上村によく似た姿であった。

5 三古碑を生んだ世界

碓井峠の東、当時「辺境」とされた「あずま・みちのく」に、8世紀までの全国の古碑11基のうち、日本三古碑と上野三碑の5基が完全な姿で現存している。このことは意外な気がしないでもないが、7～8世紀の古代東国の政治状況を調べてみると、あながち偶然ではなかったことが見えてくる。昨今の発掘調査の進展もあって東国以北は縄文時代から豊かな生活の営みがあり、弥生時代には北の津軽でさえ稲作を試みており、また、海を渡って大陸との交易も盛んであったことが推察されるようになってきた。あづ

ま・みちのくは「未開の地」ではなく、このころようやく律令国家の形を整えつつあった大和政権にとって豊かな富が期待される「未組織の地」であったのであろう。

律令国家形成・発展期の7～8世紀、東北は支配強化・開拓の再重要地点と位置付けられ、三古碑を結ぶ上野—下野—陸奥を幹線ルートとして、人・物・文化が急速な勢いで流入していった時期であると思われる。

「多胡碑」と「那須国造碑」においては、在地の実力者、おそらく、最新の技術と文化を備えた渡来系集団の長老を郡（評）の長に任じていることから、地方組織が制度化される過程が、また、そのことが石碑に刻むほど名誉なことと思わしめた当時の状況が伝わってくる。

関東経営の、更にその先東北経営の最前線、「北の遠のみかど」といわれた多賀城の門前に「多賀城碑」があった。

三古碑は、それぞれ異なる建立の事情があったが、律令国家の東北進出の中でのモニュメントであり、その事業に係わったさまざまな人々の決意と追慕と栄誉を未来に伝えようとした点で、一つのドラマの各幕場を構成していたといえよう。

6 三古碑を今に伝えた人々と時代

三古碑は、その後千年に近い時の流れの中、土中や草叢にうずもれていたらしい。しかし、その長い忘却の間にも、それぞれ文学上の伝承や土地の人の信仰に守られて激動と戦乱の中世にも、石材として転用されたり、壊されたりせず、平和な17～18世紀に再び脚光を浴びることとなった。

「那須国造碑」は、1676年に旅の僧・円順が里人に「笠石様」と信仰されている石の風聞を近くの学者で庄屋の大金重貞に語り、重貞がその調査書を水戸光圀に呈したことにより世に広まったという。光圀は、碑の近くの古墳2基の学術的な発掘調査を含め、国造碑の保存、顕彰を行った。

また、「多賀城碑」は、先に述べたように、古来からの歌枕「壺の碑」への関心の中から、江戸時代初期に掘り出され、研究対象とされたいきさつがある。

他方、「羊太夫」伝説と共に「ひつじさま」として信仰されてきた「多胡碑」も、やはり同じころ、文人墨客によって調査・紹介がなされた。

そして、「多胡碑」を研究した地元の学者・高橋道齋、木部白満らによって「上野三碑」が世に紹介されている。

群馬県博物館の企画展には、江戸時代の「三古碑」についての著述資料がたくさん展示されていた。その著述だけを見ても、上は水戸光圀や伊達藩主、新井白石、伊藤東涯、また、松尾芭蕉などの俳人、その他の書家や文人達に大きな関心と呼んだことがうかがわれる。

そして、この時代の俳句や紀行文の流行、儒学・書道・歴史研究が、知識層だけでなく、大衆的な階層に支えられていたということが、「三古碑」をめぐる市井の人々の姿をとおして見えてくる。

「金井沢碑」は、現地の案内板によれば、「農家の庭先で一時^{きめた}碁石に使われていた」という。「日本三古碑」に学ぶことにより、このような状況にあったこの碑を「上野三碑」として大事にしてきた地元の方々の見識の深さに頭が下がる。

そして、この時代の人々は、これらの史跡を信仰の対象として奉り、覆堂を建てて風雨から守るなど、永く後世に伝えるための様々な工夫と努力を惜しまなかった。全国のお好事家から人気の高かった拓本も、石や木に正確に模刻したものから採拓した拓本を広く全国に頒布している。これは、古碑を傷めないようにするための配慮からである。特に、牛伏砂岩の柔らかい「多胡碑」が、楷書の筆使いも生々しく今でも私達が見ることができるといことは、「奇跡」に近いことであるかもしれない。

この時代、「三古碑」をめぐる人々の文化財保護の努力と研究心には、郷土の歴史を学ぼうと志す私達に対し、三百年の時代をこえて訴えてくる何かがあった。

「日本三古碑(◎)」と「上野三碑(○)」のガイド

①建立年 ②建立の目的 ③所在地と行き方 ④問い合わせ先

◎ 「多賀城碑」 ① 762年

②多賀城修造記念

③宮城県多賀城市 陸前山王駅徒歩12分

④東北歴史資料館 ☎022-368-0101

◎ 「那須国造碑」 ① 700年

②那須国造直韋提の墓碑

③栃木県那須郡湯津上村 那須塩原駅からバス「侍塚駐車場」下車

④笠石神社 ☎0287-98-2501

- ◎○「多胡碑」 ① 711年
 ②多胡郡建郡記念
 ③群馬県多野郡吉井町 上信電鉄吉井駅徒歩20分
 ④吉井町郷土資料館 ☎0273-87-5235 (改築中)
- 「山ノ上碑」 ① 681年
 ②放光寺僧が母親を追慕
 ③高崎市山名町 上信電鉄山名駅徒歩20分
 ④高崎市教育委員会 ☎0273-24-0400
- 「金井沢碑」 ① 726年
 ②下賛(佐野)^{しもさね} 屯倉^{みやけ}関係者が先祖, 両親を供養
 ③高崎市山名町 上信電鉄根小屋駅徒歩10分
 ④高崎市教育委員会 ☎0273-24-0400

参考文献

- 『日本三古碑は語る』 群馬県立歴史博物館
 『多賀城と古代東北』 東北歴史資料館
 『湯津上村の文化財』 湯津上村文化財愛護協会
 『月刊・上州路』 4・5月号 (No.252号) あさを社

「上野三碑」と西上州の史跡を訪ねて

藤 由 美

今年（1995年）の旅行の計画は、昨年の夏ころ早々と決定していた。テーマは「上野三碑」^{こうづけ}、泊りは磯部温泉、時期は五月第四日曜日。ついでに貸切バスで回れる所は、すべて行きたいという欲張った企画である。会長が運悪く公務で不参加であったが、新入会員4名を含め、これまで最高の18名が参加し、バスは5月27日7時半、好天の勝田台を発車し、外環道－関越道を通り藤岡へ向かった。

1 山名八幡宮から「石碑の道」^{いしふみ}を経て「山ノ上碑」へ

藤岡J Cで、関越道は新潟と長野の二方向に分かれる。今も昔も二つの道の分岐に突き出た山名丘陵は、中世、城塞のあった丘で、山名宗全の祖・新田一族の山名氏が興った所である。その丘の山裾「山名八幡宮」で下車する。

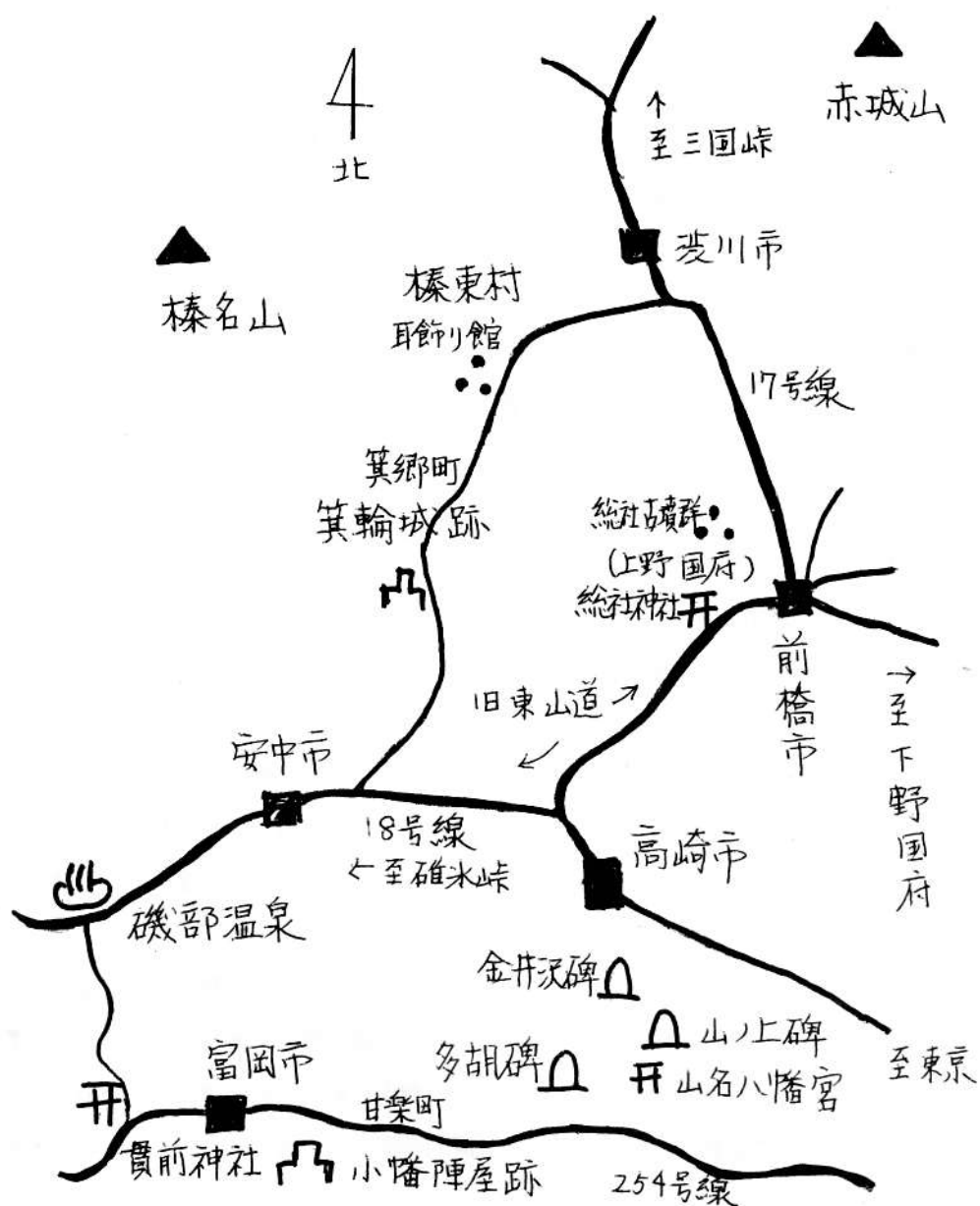
この神社は、新田氏が12世紀に宇佐八幡宮を勧請したものであるという。急な参道を登り、本殿で旅の無事をお願いし、「石碑の道」を歩いて「山ノ上碑」へ向かう。この地を詠んだ東歌などの石碑を配した展望の素晴らしい自然歩道であるが、宅地開発がこの丘にも及んできて、一部住宅地を歩くこととなった。道標をたどり、25分ほど歩いて「山ノ上碑」のある小高い山へ登り着いた。古碑は立派な堂内に納められていて、ガラス越しの見学となった。碑の右に小さな円墳「山ノ上古墳」がある。ライトを手に石室内に入ると、中世の馬頭観音が安置されていて、びっくりさせられた。

「山ノ上碑」は、「上野三碑」の一つで、681年に放光寺の僧が佐野三家^{みやけ}の血を引く母・黒売刀自^{くろめ とじ}のために建てた旨が記されており、右の古墳の墓誌であろうと言われている。もしそうであるなら、立派な石室を持ちながらやや小さめのこの円墳は、古墳の終えんするころ葬送儀礼に仏教信仰が入っていく過渡期の年号を正確に伝えてくれている重要な資料であるといえる。

古墳を背に集合写真を撮り、八幡宮まで戻ると、もう正午。バスで急いでもう一つの「上野三碑」の「金井沢碑」へ向かった。

2 刀自^{とじ}達の心を伝える「金井沢碑」

山名丘陵の山裾を少し回って谷合に入ると、すぐに「金井沢碑」への小道があった。



その小道を登ったところに、「金井沢碑」の覆堂が見えてきた。堂内の碑はよく残っていたと思えるほど磨滅し、やっと碑文が見えるほどであった。外にある説明板によると、「^{しもさめ みやけ}下賛の三家の子孫が、祖先の為に「^{ほとけ}知識に結びて」誓い奉った」ということが記されているという。



金井沢碑（横）

下賛も、「山ノ上碑」の「佐野三家」の「佐野」の一部であろう。「知識結」というのは仏教の講のことというが、「ほとけにむすぶ」という訓のひびきはすばらしい。

681年の「山ノ上碑」は佐野三家3世目の母のために一人の僧が建て、726年の「金井沢碑」は三家7世と現在の父母のために親族の刀自達を中心に9人で建てている。すぐ近くにあるこの二つの古碑は、45年の歳月の間に在家の信者が講を結ぶほど、仏教が定着していく過程を教えてくれている。そして、三家（^{みやけ}屯倉）の設置の年代も、先祖の系譜をさかのぼることにより、おぼろげながら見えてくる。

佐野は、山名丘陵の烏川沿いの地で、「^{かみつけぬ きぬ}上毛野佐野の舟橋取り放し、親は離くれど吾は離かるがへ」と東歌に詠まれた地である。二つの碑とも、主人公は^{とじ}刀自すなわち主婦であり、よき母も時に若者のラブロマンに干渉したのであろう。

3 「羊太夫」の伝説に守られた「多胡碑」

次は、いよいよ「日本三古碑」の一つであるとともに、「上野三碑」の一つでもある「多胡碑」の見学である。バスは、吉井町の集落の中へ入って行き、神社のような広場に止まった。

頑丈な覆堂、その中の「多胡碑」と、またもガラス越しの対面であるが、大きな解説板とスイッチを押すと説明が流れる工夫がされていた。



多胡碑の覆堂

笠のあるどっしりとした形の石に、大らかな字体で刻まれた6行の碑文には「三百戸の多胡郡を羊に給う」旨が前半に、後半には、任命した「左大臣石上尊」ら4名の執政者の官位と氏姓が書かれている。

律令制による建郡を誇らしげに伝えているこの碑は、その後、「羊太夫」伝承を生んでいた。「羊太夫は、石上大納言のざん言により一族と共に滅亡した。」という話で、

戦国風の脚色があるので、江戸時代にまとめられたものであると思われるが、この近くには「お羊さま」を奉る神社や墓が多数ある。かつて、渡来系の集団を率いてこの地を開拓し、その功により郡司となったであろう「羊」は、当時の中央の勢力、物部氏や石上氏、天皇家などの進出に没落を余儀なくされたのだろうか。伝承の生まれた背景は想像するしかないが、「羊」への素朴な信仰がこの古碑を近世まで伝えたことを考慮すると、あながち近世の作り話ともいえないように思える。

堂の傍らには、休憩所を兼ねた民家があり、碑の拓本の複製を買うことができた。念願の「日本三古碑」と「上野三碑」のすべての見学を達成して、私達はバスで甘楽町へ向かい、甘楽町物産センターで昼食をとった。

4 城下町小幡の面影を残す甘楽町

吉井町の西隣の甘楽町は、今は上信越自動車道で、あっという間に通り過ぎてしまう町であるが、かつて長野県への抜け道として通ったとき、あまりにも古風な町並みに時代劇の世界に迷い込んだような印象を持った町であった。

この町は、国峯城に拠った小幡氏が戦国末期に滅んだ後、江戸時代に入って織田信雄により陣屋が設けられ、小城下町として栄えて今にその風情を残している町である。町役場では、街並みや文化財を生かした町おこしに懸命で、歴史民俗資料館やふるさと体験の施設の充実に努めている。

私達は、製糸工場の倉庫を転用した資料館で鉈彫りの個性豊かな円空仏等を見学した後、武家屋敷や大名庭園の跡、織田家7代の墓等を見て回った。



貫前神社

5 上野国一の宮「貫前神社」の下り参道

バスは再び西へ向かい、鎗川と高田川の合流

点の丘の上に登り、貫前神社の表門に着いた。丘の上にある門の両側は下りの階段で、片方は一の宮の市街地へ、片方は何と社殿へと降りていくようになっている。下り参道という珍しい配置である。社殿は1635年家光の再建である。社伝による草創は、535年で、経津主、姫大神の二柱を奉るという。経津主は雷と石上系の抜鋒の神であり、姫大神は機織りと富の神である。「羊太夫」伝承から想像をめぐらすと、姫大神の後に経津主が合祀されたものであろうか。

「赤城神社が一の宮であったのに、赤城神が貫前神に機織りの管を借りたので、一の宮の位をゆずった」と赤城神社由緒略記にあるという。姫大神は、上野一の経済力を誇ったのであろうか。多胡、甘楽の谷は、渡来人の拓いた産業によって栄え、同時に東へ進出する勢力にとって通路のような役割を果たした。

この神社の下り参道という配置に、いかなる謎が隠されているのだろうか。そんなことを考えながら暮れなずむ神社を後にした。

6 磯部温泉から箕輪城跡へ

東山道沿いの温泉、「磯部かんぼの宿」で汗を流して一泊。翌28日も晴れて絶好の旅行日和。この日は、榛名山東山麓と前橋市内の上野国府の史跡を巡る計画である。

まず、長野氏対武田氏の戦国攻防の城址、箕輪城跡を訪ねた。箕輪城に拠る長野業政は西上州の多くの支城をまとめ、武田信玄の執拗な攻撃を防いでいた。しかし、城主業政の死後、信玄は小幡城をはじめ、次々と諸城を攻略し、1556年本城の箕輪城を攻め、ついに19歳の城主業盛は、御前曲輪の持仏堂にて自刃し、落城したという。



箕輪城本丸

バスは足の弱い人を気づかって狭い道を登り、「二の丸」に着いた。深い堀を渡って「本丸」の城跡碑の前で記念写真を撮り、さらに堀を渡

って「御前曲輪」を見学した。ここは、城の中でも城主最期の地となるべく特に神聖な曲輪とされたという。今は、井戸が残されているのみで、若い城主の最期を辞世の歌に偲ぶばかりである。

春風に梅も桜も散りはてて名のみぞ残る箕輪の山里 業盛

足に自信のある人は、深い谷のような堀に降り、「大堀切」から「^{おおほりきり}大手虎^{ことうもん}韜門口」を見学した。この門は、徳川氏の関東入国後、井伊直政が城主であったところに作られたもので、その石組が残っていた。

起伏のある城跡をたっぷり歩いて再びバスに乗車し、箕輪町役場の隣の「旧下田邸」の庭園を見学した。長野氏重臣の下田家は、箕輪城落城後土着した名家で、庭園は堀部安兵衛が設計した江戸初期の武家風庭園であるという。書院は日曜のため見学できなかったが、新緑がみずみずしく、よく手入れされた庭園に風雅な下田家の家風をしばし味

わい、バスで榛東村^{しんとう}へ向かった。

7 縄文の装いを伝える「耳飾り館」

上州の山麓では、昨今、多くの縄文遺跡が発掘されている。その中の一つ榛東村^{かや}の茅野遺跡は、泉わく水場を中心に営まれた縄文後期～晩期の集落で、たくさんの耳飾りが出土したことで注目された。この耳飾りをテーマにオープンしたユニークな博物館「榛東村耳飾り館」を訪ねた。

耳飾りというのは、どんなイヤリングかと思ったら、これが直径1センチから9センチの大きさの土製のピアスである。大変精巧な透かし彫りの美しいもので、ブランド品として全国に流通したらしい。初めは小さいものから徐々に耳たぶの穴を大きくして、装着していくのだろうが、縄文人の精神社会をかいま見るようで、女の人達は特に興味深かったようだ。

榛東村では、この館を中心に「ふるさと公園」「福沢一郎記念館」やワイナリーなどを整備し、村おこしに力を入れていた。私達は、隣接する「ふるさと公園」でバーベキューの昼食を楽しみ、食後、「福沢一郎記念館」を訪ねた。予定にはなかったのだが、日本のシュールレアリズムの巨匠の作品とおいしいコーヒーに、皆満足し、榛東村を後にした。

8 上野国府ゆかりの前橋総社町を訪ねて

最後に私達は、前橋市の総社町を訪ねることにした。迷路のような市街地であるが、幸い会員の植田さんの育った町であったので、植田さんの案内で宝塔山古墳と蛇穴山古墳を見学した。両古墳は、7世紀後半～末葉の大型方墳で、大化改新(645年)の薄葬令後、このような大型の古墳はまれであるという。両古墳とも石室内まで見学することができ、技術的にも高度な石組を見ることができた。特に、宝塔山古墳では石室内の家型石棺の周りを一周してみたが、本当に見事なものであった。

大化改新後もこの地に唯一君臨し続けたこの墓の主は、誰なのだろう。そんな疑問を持ったまま、私達は南へ2キロほどバスで移動し、「上野総社神社」を訪れた。この神社の付近は、上野国府推定地の一つでもあり、また、戦国時代の蒼海城跡ともいわれ、時代の節目には兵火にかかりやすく、この社も戦国時代に現在地に移って来ている。

律令制の施行に当たり、宝塔山、蛇穴山古墳の主の君臨するこの町に、上野国府とその官衙、国分寺が創られている。今は国道17号線が通っているが、昔は東山道により

下野への最短ルートであった。総社は、社伝によれば、東国平定の軍神経津主命を奉祀した神社に、律令制に伴って任命された国司の労を省くため、上野国内549社を合祀したものであるという。本殿は1571年の建築で、桃山風のきらびやかな作りである。筒粥占いによる今年の五穀の作況予測が本殿の構壁に張り出されており、赤子を抱いた家族が初参りに来ていた。私達は、旅の無事を上野の神々達に感謝し、帰路についた。

9 おわりに

今回の旅行は、上野三碑から始まり上野国府で終わった。それは、7～8世紀の律令制が東国を支配していく過程でもあった。天皇中心の中央集権の体制は、時代が変わっても大きなしがらみとなって今に及んでいるように思う。特に、フロンティアの地・坂東に対し律令制はストレートに導入されて、生まれたての国家の財政を負担させられ、大宰府や多賀城へ多くの防人を出させられ、8世紀後半は陸奥戦争の前線基地同然であった。

万葉の東歌につい哀歎を共にしてしまう坂東の私達であるが、あまりにも巧みに地方が一つの国家に組織されていく過程を、地域に生きた人々の視点からしっかり見据えていきたいと思う。

最後に訪れた上野国府（総社神社付近）は、939年平将門が新皇を名乗った地であるという。いち早く上野に導入された律令体制は、将門の乱により、その内側から破綻しつつあった。総社の成立も、実際は平安時代国司が国内の神社を巡りきれなくなったという状況での549社の合祀だったという。

1180年、源平の争乱で国府は焼失し、時代は中世へと移り変わった。坂東、すなわち、碓氷坂と足柄坂の東の世界は、古代から中世へ日本史を動かす原動力と社会の矛盾をその内側に抱え込まざるを得なかった。赤城、榛名、妙義の山の神々の在す上野の国は、また、時代の奔流の直中^{ただ}にあった国であったと思った。

参考文献

『群馬県の歴史散歩』 群馬県高等学校教育研究会歴史部会

『群馬県の歴史』 山田武磨著 山川出版社

『古代の日本 7 関東』 杉原莊介ほか著 角川書店